

ギリシャ/コス島からトルコの港町ボドロムまでは、ジェットフォイルで18分という距離である。

私の場合にはけちっているのに遅い船だが、何にせよ物価の高いギリシャとはおさらばだ。次にオリンピックが開かれる時までロングロンググッバイである。

そして、高いユーロ札なんてもう見たくもない。

無事にトルコ入国のイミグレも終わり、ボドロムの港周辺を歩き始めると、表示はユーロのままだった……。Tシャツが10ユーロ(1380円)なんて書いてある。あぁトルコよお前もか。

でも良く見ると、5枚で10ユーロって書いてあるみたいだ。おお良かった。さすがはアジア的ヨーロッパ。いやヨーロッパ的アジアか。

店員こそトルコ人だが、この港街の客はほとんどがギリシャ人もしくはユーロ圏の観光客なのだ。ガイドブックには『エーゲ海南端にある国際的なリゾート』なんて書いてある。

しかし、リゾートなんてどうでもいいのだ。コス島では医学のヘロドトスに出会い、このボドロムでは、ヘロドトスに接するのが目的なのだ。そう、【歴史の父】ヘロドトスはBC484に、このボドロムで生まれているのである。

というのはガイドブックの受け売りで、私にとっては単なるトルコの入り口である。

取りあえずお金をおろさなきゃ。ガイドブックを見てみると、100円が1,300,000リラと書いてある。どうやらスーパーインフレがあったんだろう。

ATMにカードを突っ込むと、5,000,000とか10,000,000といった幾つかの選択肢が画面に表示される。でもそれってえっと千円以下の世界じゃん、と思いながら、Otherという表示を選択し、自分で300,000,000と押してみる。3億リラである。これだけゼロが並ぶと、結構指が震えるが、自分では2万円ちょっとのつもりだ。

しかしちょっと待てよ、もしこのガイドブックが発行されてから、例えば3桁のデノミがあったとするといきなり2000万円になっちゃうぞ。2000万円もおろすと、一生トルコで生活することになるぞ、でもそんな金は銀行に入れてないから、もし出てきたらラッキーだぞ、などと思いつつOKを押すと、20,000,000リラ札が15枚、順調に出てきたのであった。2千万リラ札が出てくるって事は、何だデノミしていないみたいだな。

賑やかなお土産街を過ぎると、表示のほとんどがトルコリラに変る。あるレストランでは7,000,000と書いてあり、別のお店では8,000とか書いてある。これって一体何なんだ？そもそも7百万ってのはどういう事なんだろう。8千ってのは、ゼロ3つを省略しているのか？一体トルコの通貨ってどうなってんだろう。ゼロが多くてわかりゃしない。

お金の次に宿。この街にはペンションと書かれたたくさんの宿があることがわかり少し安心。何軒かあたり、交渉の結果2泊で35,000,000リラ(2627円)となった(ゼロが多くてややこしいので、以後35Mリラと書くことにする)。因みにトルコ語でも百万はミリオンと発音するみたいだ。この値段は1泊10ユーロ(1380円)だったパトラスの宿と変わらないが、すごくいい感じのペンションで、でかいベッドにトイレ、シャワーがついている。おまけに台所が使えるというのが素敵だ。

トルコの概要。

- 1.面積 : 78 万 km<sup>2</sup>  
(日本の約 2.1 倍。東西約 1,600km、南北約 650km)
- 2.人口 : 6,784 万人 (2000 年 10 月 : 国勢調査)
- 3.首都 : アンカラ
- 4.民族 : トルコ人。他にクルド人、アルメニア人、ギリシャ人、ユダヤ人。
- 5.言語 : トルコ語 (公用語)
- 6.宗教 : 大部分がイスラム教。他にキリスト教、ユダヤ教。
- 7.国旗 : 赤地に白色の新月と星。月と星を合わせて「善と幸福」をあらわす。
- 8.略史 : 1299 年 オスマン・トルコ帝国成立。最盛期にはバルカン、アナトリア、メソポタミア、北アフリカ、アラビア半島にまで及ぶ大帝国に発展。  
1922 年 オスマン・トルコ帝国滅亡  
1923 年 共和国宣言 (10 月 29 日) (初代大統領ケマル・アタテュルク)



### ボドルムの街

トルコの物価の感覚を掴む為に街を散策。

しかしボドルムはさすがに観光地だけあって完全にユーロ圏だ。物価が高だけでなく、ほとんど全ての店でユーロ払いOK。マックもユーロOK。ただし 1.8M リラ(135 円 けっこう高い)のハンバーガーがユーロコイン払いだと 2 ユーロ(276 円)もする。倍も取るのか。

ロシア(172 円)も抜いたギリシャでは 1.4 ユーロ(193 円)だったから、特殊事情はあるものの史上最高のハンバーガーだ。これがトルコというのは意外。因みにハンバーガーの味も大きさもギリシャと同じでごくごく普通(因みにロシアのマックはこれまでで一番美味かった。2 番はアルゼンチン)。

港には 15 世紀に建てられたピーター城という有名な城あって、ボドルムに来た観光客は一応訪れる。入場料はなんと 10M リラ(750 円)である。

安い国の代名詞トルコのイメージがちょっと狂ってきた。歩いているのもヨーロッパ人ばかりなので、これではギリシャと変わらない。

### 地元のマーケット

そこで、港からはちょっと離れたマーケットへ行ってみる。さすがに観光客はいない。

ここにあるのは主に野菜と果物。ここでナッツとくるみ、オリーブを買う。それぞれ 1M リラ。百万リラである。ゼロが 6 つもあるが、たったの 75 円。よかった、それなりに安い。

たくさんの種類の香辛料を、台にずらりと並べている店も多い。ギリシャにはないアジアチックな感じ。なんかホットするなあ。



色とりどりの香辛料。このスパイシーなおいが、マーケット中に漂っている。トルコにきましたって感じ。

そして更に先にはスーパーマーケットがある。

イスラム国であってもトルコの場合、観光客相手のレストランやお店には、当然の様にビールもワインも置いてある。ただ地元の人が行くスーパーには酒類は一切置いてないことが多いと聞いていた。この巨大なスーパーマーケットには、各種ばっちり取り揃えてあり一安心。

どうもここトルコは、イスラム教でありながら、インドネシアと同じように酒を飲む人も多い様だ。

徐々に雑炊をすることにした。それなりに物価の安い国に来てから自炊するってのも変だが、アテネで会った後輩が、気の利いた事に焼き鳥の缶詰を持って来てくれ、これをギリシャで食べたならそれまで抑えていた日本食への欲求が一気に爆発。台所を使えるところに来たら、まずは醤油ベースの雑炊だと心に決めていた。暑い季節に雑炊なんてめったに食べたことないのにもかかわらず...。そしてこの後輩には粉末のダシも持って来てもらっていたのだ。この宿、台所は使えたが、鍋がないので鍋まで買ってしまった。恐るべし私の食欲。

せっかくトルコに来たので、羊肉を買って羊雑炊。モンゴルを思い出す。ただ羊肉はあまり安くなく、100gで100円くらい。卵も1個だと20円くらいした。やっぱり安くないぞトルコ。

羊の味にトルコを感じながらも、ダシと醤油が醸し出す日本の味は格別で、幸せな気分できつろいでいると、ドアをノックする音が。隣の部屋の若者だった。言葉が通じないがトルコの何とかという都市からやってきたらしい。チョコレートを差し出すので受け取った。これがヨーロッパなら睡眠薬入りとかを警戒しなきゃいけないのだが、トルコではこうした親切がとても多い。道を尋ねたら丁寧に教えてくれるか、その場所まで連れていってくれる。あまりお金が無いんだよ、という少しだけだけど値引きしてくれる。

何だかよそよそしいギリシャから来たせいも、トルコの親切がとても新鮮である(トルコって国は、東から西へ流れる薬物が通過する拠点でもあり、実は睡眠薬強盗が多い事も事実)。

## 古代世界七不思議

誰が言ったのか、古代世界七不思議というのがあるらしい。不思議と言っている割には、『7つの見るべき建造物』という意味なんだそうだ。

1. ハリカルナッソスのマウソレイオン
2. エジプトのクフ王の大ピラミッド
3. バビロンの空中庭園
4. エフェスのアルテミス神殿
5. ギリシャオリンピアのゼウス像
6. ロードス島太陽神ヘリオスの青銅巨像コロッソス
7. アレクサンドリアのファロスの灯台

の7つ。この内、現存するのはピラミッドだけ。

1.のマウソレイオンの遺跡がこのポドロムにあるというので行ってみることに。

マウソロスという人の、自らの墓として建設したものらしい。



マウソレイオンはこんな建物だったらいい。高さは42メートルだから結構大きい。

発掘された像の一部はロンドンの大英博物館にあるそうだ。

何てことない遺跡だった。溝があって石ころが転がっている(遺跡好きの人にとってみれば、とんでもなく失礼で貧相な説明なんだろうな、きっと)。

入場料は4Mリラ(300円)。何か物価が安くないことを確認しに行ったみたいなのがするなあ。

## パムッカレへ

トルコ観光の目玉の1つ、パムッカレという場所がある。

温泉である(ヒエラポリスという遺跡もあるけど)。

トルコには西部だけで1000ヶ所以上の温泉があるらしいが、トルコで温泉と言えば、間違いなくパムッカレというのが世間の相場らしい。



ボドルムのバスターミナルには、十数社のバス会社が入っているが、どのバス会社に行っても『パムッカレには直接行かない、デニズリという都市まで行って、そこでミニバスに乗り換える』と言われた。

しかしただ一社だけ、パムッカレというバス会社だけは、そのデニズリを經由してパムッカレまで大型バスを走らせている、と言う。さすが会社の名前がパムッカレというだけある。

実は、壊れてはいるものの、そしてギリシャのコス島でも修理不能と言われたものの、まだ何とか乗れるので、トルコまで自転車を持ってきたのだった(因みに6ヶ国目どこまで持っていけるだろう)。

ミニバスには自転車が乗らない。だからパムッカレまで直行してくれる大型バスが必要だったのだ。

ところが、このパムッカレバスの受付嬢は、会社のルールでバスには自転車を乗せないことになっている、と言う。他のバス会社では全社が『自転車? ノープロブレム』と言ってくれるのに、よりによってパムッカレまで行ってくれるこのバス会社だけノーという。何か意地悪な感じ。これが前日の話。

だからドライバーに直接交渉する為に、この日はだいぶ早めにバス乗り場に来たのだった。

行き先がデニズリではなくパムッカレという事も確認しつつ、自転車をお願いすると、何の問題もなく、格納庫に入れてくれた。大型バスだから、座席の下のほかでかい格納庫には自転車が立ったまま入る。何の問題も無い。もちろん自転車は無料である。

自転車OKという事を確認できたので、例の受付嬢からチケットを購入する。

『パムッカレ ワンチケット、ノットデニズリ』と念押し。

彼女は、直接交渉が成功したのを知って“ちえ”ってな顔をする。やっぱり受付嬢の意地悪だったか。親切なトルコ人だが、例外もいるんだなあ。

ある旅行者が言っていたが、トルコ人の中には、アジア人を馬鹿にする傾向があるという。ヨー

ロッパ人にはへつらい、アジア人を下に見るらしい。そんな一面を垣間見た気がする。

4 時間半でデニズリに着いた。あと 30 分でパムッカレである。何だ、このバスの乗客はほとんどパムッカレには行かないのか、と置いていたら、ここが終点だと言う。

パムッカレにはあっちのミニバスに乗れと。騙された。何が『パムッカレに行くのはうちのバスだけ』だ。デニズリ行きなら、どのバス会社でも最初から自転車OKだったのに。

後で聞くと、どうもトルコのバスは、約束した中継駅でのミニバスの無料サービスが無かったり、行き先そのものを偽ったりするケースがあるらしい。これも過当競争だから何だろうが、お金を払った相手は遥か彼方にいるのでどうしようもない。同じバス会社の人間に言ったところで、俺は知らん、となってしまう。

会社の名前がパムッカレの癖に、パムッカレへは別の会社のミニバスに乗れなんてずいぶんひどい連中だ。

予想通り、ミニバスには自転車が乗らない。バス会社の人間らしき男がドライバーといろいろ相談しているが、ドライバーは誰も無理だという。ここデニズリからパムッカレまでは 20 キロなので、自転車なら 1 時間強なのだが、騙されているので漕いでいる時間はずっと腹が立つに違いない、坂道だったらなおさらだ。今日は風も強い。何としてもバスに乗りたい。

## パムッカレの宿

このバス会社の人間らしき男は、実はパムッカレの宿の客引きだった。

20 キロ離れたこのバスターミナルに営業に来ているのだった。

そして彼曰く『なんなら私の宿の車で自転車を運んであげるよ。うちは温泉のプールがあるし、温泉まで近いよ』。顔は、偽ジャンレノという感じでちょっと怪しいが、とりあえずその誘いに乗ることにした。彼の名前を聞いた。アリババというらしい。さらに怪しいぜ。

車に乗って 10 分もすると、遠くの方に山が見えてくるが、一ヶ所だけ斜面が白くなっている。あれがパムッカレ温泉だと言う。

パムッカレの村自体は人口 4000 人程度で観光だけで成り立っていて、ペンションが多く並んでいる場所だ。

着いた宿は結構まともだった。1 泊 15M(1125 円)である。確かにプールがある。さらにプールサイドにレストランあり、温水シャワーあり、天井のファンあり、網戸ありと、一応ちゃんと揃っている。

ただ、ここに来るまでにやはりたくさん宿がある事が分かった。周辺の宿はもう少し安いみたいだ。それにこのプール温泉は、とても冷たい。宿の場所はちょっと奥まっている。自転車を運んでもらったという恩義はあるが、やはり再検討した方が良いかもしれない。

入ってみると、宿の受付はすごい美人だった。

やはり、自転車を運んでくれた訳だし、ごちゃごちゃ考えるのは男らしくないと言える。ここに泊まることにした。

その受付の女性は、一見日本人にも見えたのだが、聞いてみるとスウェーデン人だった。お母さんが韓国人なんだそうだ。そして旦那はアリババなんだと(やはり、この宿は蚊も多いみたいだし泊まるかどうかは、再検討した方が良くもしい、ってもう遅いか)。

きっかけは、彼女がトルコを旅していて、私と同じようにバスターミナルでアリババに声を掛けられたんだそうだ(アリババに『明日の呼び込みは俺に任せろ』と迫る私)。

99%がイスラム教徒というトルコで、珍しくアリババはクリスチャンなんだそうだ。彼女は結婚してからも、結婚する前と全く変わりなく外国やトルコ国内を行き来できるという(というのは、トルコ人男性と結婚すると、自由に外国や国内を行き来することが難しくなるそうだ。このパムッカレにも日本人女性がトルコ人と結婚していて、宿とネットカフェを営んでいる。聞いてみると彼女も同じ事を言っていた)。

### パムッカレ温泉

早速温泉へ。宿から歩いて3分で入り口に着く。ここで入場料5 Mリラ(375円)を支払う。

石灰の斜面の遊歩道では、途中で靴を脱ぐ事になっている。石灰石が固まったところは問題ないが、ジャリになっているところは足つぼマッサージになってしまって結構痛かったりする(温泉が流れているので健康に一石二鳥かも)。石灰石のところはざらざらになっていて歩きやすいが、足の裏を強くこすりながら歩くと、足の裏がきれいになっていく(世界遺産で角質層を取り除いていいのか!)



石灰分が固まった白い斜面を靴を脱いで上がっていく。上からは温泉が流れて来ているが、下の方はもう冷たい。

この遊歩道に沿って、白く塗られたプールが幾つもあるが、上の方には本物の石灰棚がある。石灰水の温泉が高い山の中腹から流れ出て、山肌を流れ落ちながら作り上げたものだ。温泉の主成分はカルシウムと二酸化炭素、つまり石灰。長い年月を掛けて付着してテラス状になり、石灰棚を形成するんだそうだ。そのテラスを含め、高さ100メートルに亘って幻想的な白い景観を作り出している。【パムッカレ】のパムックは綿、カレは城という意味らしい。



石灰棚。まさに自然が作った芸術作品。青い空を反映して白と青のコントラストがきれい。

その石灰棚は流れ落ちる温泉を満たしたプール状になっていて、真っ白なテラスと、青い海、青い空のコントラストは実に美しい。独りで来る場所じゃないかも。

上部から流れてくる水温は 35 度程度だから、斜面の下の方に位置するプールでは白濁した冷たい水になっている。景色は最高だが、まったく温まることは出来ない。

入浴する温泉は、さらに上部にあるのだった。ただ入場料 16M リラ(1200 円)という。異常に高い。これだけ高いと見るだけにしようかと悩むところだが、ここはやはり入るべき温泉の 1 つなのだった。

何とんでも、大理石で出来たローマ時代の柱が、温泉の底に幾つも横たわっているのである。そんな温泉はなかなかない。

お湯は大量に炭酸を含んでいる。そのせいか目に染みる。口に含むとちょっと酸っぱい。体に泡がついてくる。

これまでも幾つか似たような炭酸の温泉に入ってきたが、この炭酸度が一番で、皮膚を手のひらで押さえると、プチプチとなるのが楽しい。温度は 37 度程度。

私はとても目が悪いので、初めて入る温泉には眼鏡のまま入る事にしている。トップレスはいないが、さすがヨーロッパ。胸がはちきれんばかりの...

もとい。眼鏡の話である。炭酸もすごいが、石灰分の含有量もすごい。何時の間にかレンズに付着してだんだんと透明度を失い始めるほどだ。

温泉はところどころ深い。しかもいきなり。深さ 4m ぐらいのところもある。遺跡が沈んでいるところに温泉を溜めたという構造だからだ。中には用意のいい人がいて、シュノーケルで大理石の円柱や構造物を見学している。

この円柱、ただの円でなく、伊達巻の様な形になっていて、尖っているところを足裏に当てると実に気持ちいい( 。ローマ遺跡で足マッサージをしていいのか! )。

### カラハイト温泉

パムッカレ温泉から 5 キロの場所に、カラハイトと呼ばれる温泉があるというので行ってみることに。

ただここには温水プールはあるものの、公共浴場は残念ながらなかった。

周辺のペンションはこの温泉を引いているそうだが、源泉にあるのは足湯だけ。

というか、温泉が出たけど出しっぱなしです、って感じで、お湯が平面に溜まっているという感じ。実にもったいぞトルコ人。



ローマ時代の柱が沈む温泉の池。4メートルぐらい深いところもあって素潜りで遺跡見学をする人もいた。



パムッカレ温泉から 5 キロ離れたカラハイト温泉。ここは鉄分をたっぷり含んだお湯。

パムッカレと違って、お湯の成分にはたっぷり鉄分が入っているようだ。お湯が流れているところは赤く染まっている。飲んでみると、鉄味の苦みがとても強い。毎日少量なら体によさそう。温度は源泉が 50 度以上。それが周辺に流れていって、各自丁度いい温度で足湯につかる。熱い温泉が好きな私でも、さすがに源泉の近くには到底近寄れない。

しかしスカーフを巻いたトルコ人の若い女性が、平気な顔して源泉の近くにいる。どう見ても 48 度はあるぞ。その女性、私にここに来いという。

熱い温泉が好きな私である。若くてきれいな女性とは無関係にやはり源泉に行くべきだろう。早速行ってみるが数秒でギブアップ。熱いところで体(というか足)を馴らしてからだったのだが、全然無理だった。恐るべしトルコ女性。

## 泥温泉

宿のプールサイドでくつろいでいると、カムツパレ温泉から 20 キロ離れた場所に、泥温泉があると宿のスタッフが教えてくれた。人数が集まれば車を出すと言う。生憎日本人は私一人である。近くのテーブルに座っているイタリア人男性はきっと行きそうも無い。

プールサイドにいるアイルランド人とニュージーランド人の 3 人は、若い女性らしく、照りつける太陽に思いっきり肌を露出させているので、きっと温泉で癒す必要があるだろう。国際的な思いやりの一環として彼女たちに声を掛けてみる。

しかし『泥温泉には興味があるけど、今夜フィッシングツアーに出かける事にしてしまったので懐具合が厳しいのよ』と言って断られた。

肉料理の国トルコまで来て、何も魚って事も無いだろう、しかもあなた達、自分の国は、島国なんだから、帰れば魚が食えるじゃないと思わないでもないが、まあ仕方が無い。

そうすると、まあ 20 キロも離れているし、一人 30M リラ(2250 円)もするし、泥温泉はなにもそこだけじゃないので、あっさり諦めようとする、イタリア人が『おれ、行く』と。

結局、そのイタリア人/マルコと出かけることに。

周囲は畑ばかりなのだが、そんな場所からポコッと温泉が湧いちゃいましたって感じの場所であった。湯治場の様に 1 軒だけ宿がある。屋内にも浴槽があるようで、女性の賑やかな声が聞こえてきた。

我々は露天に行く。辺りは硫黄臭がきつい。浴槽は 3 つ。小学校のプールの様な大きい浴槽には、濁り湯が溜まっている。深さは 1.5 メートルもある。温度は 45 度。さすがにここでは 25 メートルぐらいしか泳げない。他に客は誰もいなかった。早速マルコと二人で全裸に。



3 つある浴槽の 1 つ、泥浴槽。真っ黒な泥を体に塗ると肌がつつるになる。

大きなプールの横には小さい浴槽。ここはあまり濁っていないが、源泉の上澄みをそのまま持ってきました、という感じの場所です。とても暑い。47 度。長くは入ってられない。そしてもう 1 つ、



泥温泉の浴槽がある。温泉のうわ水をそっと取り出して泥を溜めた浴槽だ。

この泥を体に塗りたくる。顔にも頭にも塗りたくる。マルコと二人で、即席ブラックアフリカンの出来上がり(ここへ連れて来てくれた宿の人にカメラを渡し、マルコと二人で記念撮影をする。その写真をここに載せる予定だったが、手のひらが大きな私はよかったものの、手のひらが小さいマルコの場合、隠れていない可能性があるので載せないことにした。体はでかいのに、手のひらが小さいなんて、困った奴だ)

この泥をシャワーで落としてプールに行くと、肌がつるつるになっていた。

マルコは遺跡の仕事をしているらしい。その為にトルコに来ていたのだ。

アメリカ、ドイツ、イタリアのチームがトルコの遺跡発掘、補修、保全等を手伝っているらしい。アメリカが結構大きなお金を出しているそうだ。いい事もやってるじゃん、アメリカ。

箱物外交(ODAとして、発電施設や橋だの港だのといったハードな物を中心に援助をし、外交に役立てるやり方。結局、日本の建設会社や商社が儲かることにもなる)だけじゃなく、こういうソフトな援助でジャパニーズフラッグを見たいものだ。

マルコがそういう国際貢献に尽くしているという事を知って友人になれて良かったが、マルコよ、俺はおまえがホモじゃなくてもっと良かったよ。

『トルコはきっとユーロに入れない。イスラム教は、キリスト教ほど人の尊厳を重要視しないから。例えばホモは認めないってんじゃあ足並みが揃わないよ』という話の後に、いきなり泥を私の背中に塗ってくれた時には鳥肌が立ったが、泥で隠れて良かったよ。

一旦宿に戻る。私は島国日本人なので、やはり魚が食べたいところだ。トルコは肉料理が多いしな。丁度、今夜フィッシングツアーがあったので参加することにした。参加者は、偶然女性ばかりだった。魚の味は覚えていない。

つづく